



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば

年間第4主日B年(2021年1月31日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 18章15－20節

第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙I 7章32－35節

福音朗読：マルコによる福音 1章21－28節

今日のテーマ：預言者のことば、律法学者のことば、イエスのことば

## 説教

預言者とは読んで字のごとく、神さまから言葉を預かり、それを人々に語る人のことです。それは、今日の第一朗読に従えば、「あなたたちの同胞の中から」とありますから、特定の人々に託された使命ではなく、広く人々の中から神さまが選ばれるのです。預言者はいわば神と人の仲介者です。ですから、自分勝手なことをしてはなりません。仲介者として立ててくださった神さまに忠実でなければなりません。第一朗読の最後の箇所はそのことを伝えます。「その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない」。預言者と人間の関係はどうでしょうか。いきなり預言者と選ばれた訳で、しかも、いきなり神さまのことばを伝える訳ですから、預言者は人々から受け入れがたい存在です。エレミヤもエゼキエルもそうでしたが、預言者は人々から疎んじられ、時には攻撃され、拒否されます。そんな理不尽な存在です。

福音はカファルナウムでのイエスさまの最初の宣教の様子を伝えます。当時、それぞれの町には会堂がありました。シナゴグと呼ばれます。人々は安息日ごとに集まり、神の御言葉に耳を傾けました。会堂は礼拝の場であり、同時に律法を教える場であり、そしてなによりも神の御言葉に従って生きていくユダヤ人たちの心の拠り所でもあったのです。そこで活躍したのが律法学者と呼ばれる律法の専門家たちでした。彼らには知識がありました。たくさんの律法を暗記していましたし、律法の解釈(タルムード)も覚えていました。そして、会堂で話しをするときには自分の知識から語ったのです。「律法にはこう書いてある」、「それはこれこれこういう意味だ」、「だから律法に従わなければならない」。結論は、いつも道徳的な勧めだったと思います。それはカファルナウムの貧しい人々にとっては、何も心を打つ話ではなかったでしょう。「ああ、また律法学者が語っている。もうあきあき」というのが人々の率直な感想だったのだと思います。

イエスさま一行はカファルナウムの町に入ります。新共同訳には訳されていませんが、町に入るなり、すぐに会堂で教え始められました。ここから、イエスさまの務めの第一が語ることに、神さまの語ることにあったことがわかります。人々はその権威のある教えに驚きます。どんなお話しをしたのかは今日の朗読箇所には書いていません。しかし、真ん中にある汚れた霊に取りつかれた人の物語から、イ

エスさまの語る言葉をうかがい知ることができると思います。「そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ」とありますから、この男の人はその場に居合わせたのでしょう。町の誰もが、この男が汚れた霊に取りつかれているのは知っていたと思います。カファルナウムはそんな大きな町ではありません。そんな人が、会堂という公の場所に現れて、居合わせるの不思議です。なぜなら、汚れた霊にとりつかれた人は、律法に従えば「罪人」だからです。公の場に姿を現してはならないのです。律法に違反します。しかし、何かに引かれて、この男の人は会堂に来ます。それは、汚れた霊から解放されたいと願っていたからではないかなとわたしは思います。

イエスさまが語る言葉は、律法学者たちの言葉とはまったく違いました。山浦玄嗣は『ガリラヤのイエシュー』の中でこの箇所を次のように訳しています。「休み日ともなれば、待ちかねた様子で、イエシューさまは村の寄合に出かけて行き、教えなされたものでござる。それも、掟語り衆の教え様とはまるで違って、堂々と自信に溢れ、少しも臆せず、のびのびと教えなされたものでござる。それで、聞く人はその教え様にいつも舌を巻いて感服していたものでござった」。掟ばかりを語り、人々を律法でがんじがらめにする律法学者とは異なり、イエスさまは、自分の心の中からあふれてくる言葉を語ったのでしよう。有り体の言い方になって恐縮ですが、イエスさまの言葉には優しさがあつたのです。愛があつたのです。だから、この男の人の中にいる汚れた霊が叫び始めます。「かまわないでくれ」。

預言者は神の言葉を語りますから、それは人々の胸に突き刺さる痛い言葉です。律法学者は律法について語るだけで、人々の心には届かない空虚な言葉です。しかし、イエスさまの言葉は、相手の心に届き、心の奥深い所に響きます。なぜなら、イエスさまは相手の立場に立って語るからです。そして、イエスさまの言葉は短く、力があります。「黙れ。この人から出て行け」。混乱の極みにあつて、生きる気力を失い、どこへ向かって生きてよいか分らなくなっている人間に、イエスさまはその人の苦しみと悲しみをくみ取りながら、それでも本来のあるべき姿へ戻すようにと語りかけるのです。

早いもので、今年も一ヶ月が過ぎてしまいました、この一年、主日のミサの中で響くイエスさまの言葉に耳を傾け、それに力づけられて生きていきたいものです。

## 汚れた霊について

悪霊と同じ意味だと考えてよいでしょう。当時は、人に汚れた霊が取りつくと、その人は狂気となると考えていました。そして汚れた霊が出て行くと正気に戻るとも考えていました。イエスさまの宣教活動には狂気から正気への回復があります。現代人のわたしたちにとっては汚れた霊に取りつかれた人とは、何かに取りつかれたように「我を失った」人と理解したらよいかと思います。

汚れた霊あるいは悪霊の追放の奇跡は、古代世界ではよく見られた現象です。そして、それを伝える物語もある一定のパターンで書かれています。今日の福音でもそういったパターンが読めます。①悪霊は霊能者に気がついて、相手の名を呼ぶ。こうして相手を支配し、自己防衛を図る(23-24節)。②霊能者は悪霊に沈黙を命じる(25節)。③悪霊が追放される(26節)。④目撃者が驚く(27節)。

イエスさまは古代オリエント世界に多くいた霊能者の一人ではありません。「権威ある新しい教え」を語ることで、神の国が到来したことを告げるのです。汚れた霊を追い出す行為は、神の国が具体的に実現したことのしるしとなります。イエスさまは他の霊能者とは違って「『黙れ。この人から出て行け』とお叱りに」(25節) なります。得体の知れない魔術的なものに頼らずに、ことばに頼って、ことばによって人を解放されるのです。